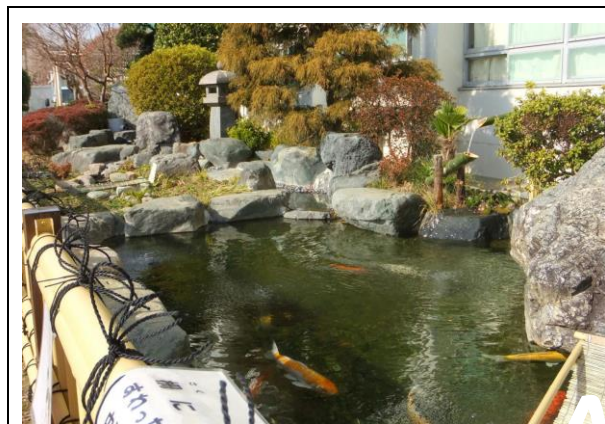


成果報告書 概要

| | | | |
|----------|--------------------------|------------------------------|---------------------------|
| 2011年度助成 | | (実践期間：2012年4月1日～2013年12月31日) | |
| タイトル | 岡崎の四季 ～生命尊重の心を育む環境教育の推進～ | | |
| 所属機関 | 平塚市立岡崎小学校 | 役職 代表者 連絡先 | 学校長 鈴木 正行 0463-58-0158 |

| 対象 | 学年と単元： | 課題 |
|-------|---|--|
| ○ 小学生 | 1・2年「はるをみつけよう」 | ○ 教師の指導力向上を目指す教員研修、実験方法指導、教材開発 子ども達の科学的思考能力の向上を目指す授業づくり、教材開発 ものづくり(ロボット製作等)による、科学分野で活躍する人材の育成 その他 |
| 中学生 | 3年「身近なしぜんのかんさつ」 | |
| 教員 | 4年「春の自然」「1日の気温の変化」 5年「メダカの誕生」「流れる水の働き」 | |
| その他 | 6年「命のつながりをみる」 | |



| | |
|----------------|--|
| 実践の目的： | 生命尊重の心を育むためには、いのちあるものに触れさせる場や機会が必要である。子ども達は、生き物(昆虫、小動物そして、魚など)が好きである。本校には池があるが現在は使われておらず、魚もいない。子ども達の多くは、常日頃から、この池を話題にし、池に泳ぐ魚の姿を切望している。この池を整備し、学習に生かせる環境教育ゾーンとして活用することが、児童に生命尊重の心を育み、自然環境について学ぶことにつながると考える。 |
| 実践の内容： | 現存する施設を基に池周辺の環境整備を行った。この環境整備を行うにあたって、子ども達の想いを吸い上げることを大切にしてきた。子ども達の想いを大切に、職員、岡崎に集う人々の発想・創造を加味して昭和から平成、未来へと夢を託しながらアイデアを集い、環境整備を行った。子ども達の想いの具体としては、学年・学級等での活用方法の考察等を通して、アイデアを募る児童会・委員会活動を想定してのアイデア等も募集した。 |
| 実践の成果： | 池をとりまく環境教育ゾーンを整備することで、まさしく、いのちを大切にする教育が可能となり、子ども達の生命尊重の下地が養われた。心の育ちの面から言えば、池が、学校敷地内にあるということは、校内に心安らげる場があるということであり、その経験・体験が、自然の不思議や四季の変化など豊かな感性を育てる一つとなった。 |
| 成果として特に強調できる点： | 子ども達が日々、池に触れることがまさしく、感性を揺り動かしていくことになった。自然や環境に対する柔らかな感性を育むことにつながり、ひいては生命尊重の心を育むことにつながった。子ども達ばかりか、地域の方々や年間を通しての幾多の行事等で本校を訪れるの方々にとっても、環境教育ゾーンの存在は、大変意義深いものとなった。 |

成果報告書

| | | |
|----------|--------------------------|-----------|
| 2010年度助成 | 所属機関 | 平塚市立岡崎小学校 |
| タイトル | 岡崎の四季 ～生命尊重の心を育む環境教育の推進～ | |

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）
2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）
3. 実践の内容
4. 実践の成果と成果の測定方法
5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）
6. 成果の公表や発信に関する取組み
7. 所感

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

生命尊重の心を育むためには、いのちあるものに触れさせる場や機会が必要である。子ども達は、生き物（昆虫、小動物そして、魚など）が好きである。学校の敷地には限りがあるが、その限られたスペースを有効に利用し、できるだけ、子ども達の興味・関心のあることに活用したい。

本校には昭和 53 年に当時のPTAが造営した池がある。しかし、現在は使われておらず、魚もいない。子ども達の多くは、常日頃から、この池を話題にし、池に泳ぐ魚の姿を切望している。この池を整備し、学習に生かせる環境教育ゾーンとして活用することが、児童に生命尊重の心を育み、自然環境について学ぶことにつながると考える。

池の復活は、いのちの根源に通じる。これを命題に、「いのちの教育」を常に見据えた活動を考えていきたい。「いのち」の宝物がこの池にはたくさんあったのではないかと、そして、この池を創った先人の想いも、この「いのちの育み」にあったのではないかと環境教育ゾーンとして整備した「池」の復活が本校に毎日通う子ども達の新たな楽しみや学びの一つになってくれると確信している。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

春（桜の木）夏（池）秋（樹木）冬（樹木＋二宮金次郎）

- ・ 池の改良（・井戸水の復活 ・獅子脅し ・彫刻、鶴等による給水設備 スイキンクツの設置）
- ・ 池の前及び後面の竹柵の設置
- ・ 昭和 47 年設営の池の解体と秋へ移行
- ・ 二宮金次郎を冬へ
- ・ ソーラー百葉箱の新設

3. 実践の内容

「岡崎の四季」

～ 池を中心とした環境教育ゾーンを活用して展開する教育活動 ～

学習としての実践

・1年～6年の各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間・学校教育全般

■理科

(3年)「身近なしぜんのかんさつ」「植物の一生」：環境教育ゾーンを観察することにより、岡崎にいる身近な生物に親しみを持つことができた。

(4年)「春の自然」「1日の気温の変化」：池の生き物の成長を池の水温や気温などの関わりで捉えることができた。

(5年)「メダカのたんじょう」「流れる水のはたらき」：川や池を使って、流れる水の働きを調べたり、メダカの生命の連続を確かめたりすることができた。

(6年)「いのちのつながりをみる」「自然とともに生きる」：環境教育ゾーンを使って、水や大気などの環境問題を扱うことができた。

■生活科

(1～2年)「はるをみつけよう」環境生活ゾーンを使っての観察

■総合的な学習の時間

(3年～6年)環境教育ゾーンとのかかわりを通して、自ら課題を持ち、調査・研究・問題解決を通して、その成果を発表・伝えるというダイナミックな教育活動を展開することが可能であり、その為の自然の教材として活用した。

環境整備（児童、教職員の意見を吸い上げて）

現存する施設を基に池周辺の環境整備をしていった。この環境整備を行うにあたって、子ども達の想いを吸い上げることを大切にしてきた。子ども達の想いを大切に、職員、岡崎に集う人々の発想・創造を加味して昭和から平成、未来へと夢を託しながらアイデアを集い、環境整備を行った。子ども達の想いの具体としては、・学年・学級等での活用方法の考察等を通して、アイデアを募る児童会・委員会(飼育委員会等)活動を想定してのアイデア等も募集した。

4. 実践の成果と成果の測定方法

○児童・生徒の学びの姿の変容など、成長をとらえる視点

本校では、すでに5年生で地域との共存の観点からも社会科の農業の単元で、地域にある本物の田を借り、年間を通しての農業活動を行っている。学校の周りには自然、遠い昔から連綿と続いてきた人々の営み、この伝統・文化というものを教科学習、あるいは総合的な学習の時間を通して活用していくことは、児童の心の育ちを願う視点からも大変価値あることととらえている。

33年前に当時の関係者の手によって作られた池の設備を、あらたに環境教育ゾーンとして整備し、当時の人々の想いを受け継ぎつつ再活用していく中で、命そのものの大切さ、命を育む環境の大切さに気づかせていくことができた。

教育の学習面と心の育ちの面から子ども達に期待する学びの姿については、具体的に次のような成果があった。

教育の学習面では、理科で考察すると、

「身近なしぜんのかんさつ」(3年) 環境教育ゾーンの観察することにより、岡崎にいる身近な生物に親しみを持つことができた。

「春の自然」「1日の気温の変化」(4年) 池の生き物の成長を池の水温や気温などの関わりで捉えることができた。

「メダカのたんじょう」「流れる水のはたらき」(5年) 川や池を使って、流れる水の働きを調べたり、メダカの生命の連続を確かめたりすることができた。

「いのちのつながりをみる」「自然とともに生きる」(6年) 環境教育ゾーンを使って、水や大気などの環境問題を扱うことができた。

他の教科や総合的な学習の時間でも取り組んできた。池をとりまく環境教育ゾーンを整備することで、まさしく、いのちを大切にできる教育が可能となり、子ども達の生命尊重の下地が養われた。

心の育ちの面から言えば、池が、学校敷地内にあるということは、校内に心安らげる場があるということであり、その経験・体験が、自然の不思議や四季の変化など豊かな感性を育てる一つとなった。児童期に、いのちある生き物に多く触れる経験・体験は、その感性を磨き、やさしさと責任感のある人間へと育むことにつながった。つまり、それは、いのちの継続(連続性)を身を持って感じることである。

5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

環境教育ゾーンの整備によって、子ども達は、自ら課題を持ち(見つけ)、調査・研究・問題解決を通して、その成果を発表・伝えるというダイナミックな教育活動を展開していく可能性がふくらみ、今後はその有効活用について研究を深めていきたい。

今後の実践としては、「池から始まる岡崎の学習」あるいは、「岡崎の四季から生まれる学習」といった学習課題を教師側として持ち、子ども達自らに課題設定となる様、助言していきたい。具体的には、各教科(特に低学年の生活科。高学年の理科は、その教材としてうってつけである。:樹木や植物に注目した生活科・理科学習等。)また、発展的学習においては、その内容が豊かに広がっていくものと考えられる。学年・学級等の活用から始まり、総合的な学習の時間等の活用により、自校にある自然を生かして、日常の学習に利用していく。そして、その実践報告の場として、・授業参観、ふれあいカーニバル等での発表を計画していきたい。また、本校の秋のお祭りである、ふれあいカーニバル、運動会、委員会だより、PTA広報や地区レク等でも発信していくことが可能である。本実践研究を通して、「岡崎の四季」を満喫した人々(大人も子供も)が、環境を大切にし、生命を尊重することについて自然と語り継ぎ、発信していくものと確信する。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載されたり放送された場合は、ご記載ください

○成果を外へどう発信していくのか

環境教育ゾーンにおける自然との関わりから学んだことを、本校の秋のお祭りである「ふれあいカーニバル」で、運動会で、委員会活動を通して、委員会だより等で配信していくことを考えている。そして、PTA 広報や地区レク等でも発信していくことが可能である。また、市内の学校への発信も考えている。「語り継がれる」という言葉があるが、環境の大切さは、まさに語りつがれていくものであろう。「岡崎の四季」を満喫した人々(大人も子供も)が、環境を大切にし、生命を尊重することについて自然と語り継ぎ、発信していくものと確信する。

7. 所感

今から、33年前の昭和の時代の人々が起ち上げた池の設備。この復活により、子ども達が日々、その存在に触れることがまさしく、子ども達の感性を揺り動かしていくことになったと考える。日々の活動としては、環境美化や生き物の世話を飼育委員会など、子ども達で分担して、継続運営していくことが、自然や環境に対する柔らかな感性を育むことにつながり、ひいては生命尊重の心を育むことになった。学校に通う児童ばかりか、休日・夜間等に集う地域の方々や年間を通しての幾多の行事等で本校を訪れるの方々にとっても、環境教育ゾーンの存在は、大変意義深いものとなった。